

平成25年度 創立者古屋賞・山梨学院スチューデントズ オブザ イヤー賞 受賞者一覧

【創立者古屋賞】

NO	部門	氏 名	学科	学年	所 属	推 薦 内 容
1	創立者 古屋賞	タカナシ ヒロトシ 高梨 裕稔	法	4	硬式野球部	2013年プロ野球ドラフト会議において、北海道日本ハムファイターズ4位指名を受け入団 関甲新学生野球リーグ戦通算26勝、最多勝勝利投手賞(2回)、最優秀防御率賞、ベストナイン賞 2011年・2012年関東地区大学野球選手権出場の実動力
2	創立者 古屋賞	レン ツェンリン 連 珍鈴	法	4	柔道部	世界柔道選手権2010東京大会・2011パリ大会・2013リオデジャネイロ大会に台湾代表として出場 第16回アジア競技大会 57kg級3位 第27回ユニバーシアード競技大会 57kg級3位 2012アジア柔道選手権大会 57kg級2位 平成23年度・平成24年度全日本学生柔道優勝大会 優勝に貢献、4年時は主将を務める 平成24年度全日本学生柔道体重別選手権大会 57kg級優勝

【スチューデントズ オブザ イヤー賞・大学院】

NO	部門	氏 名	学科	学年	所 属	推 薦 内 容
1	学術 (修士論文)	タカノ ショウコ 高野 聖子	社会科学 研究科	2	秋峯晴男ゼミ	キャピタル・ゲインへの課税については、譲渡時には課税が行われるものの、相続時には、限定承認等の一部の場合を除いて、相続人の相続財産の譲渡時まで課税が繰り延べられることとされている。しかし、この取り扱いについては、課税の公平などの観点から問題があり、検討が必要であるとする。そこで、本論文は、キャピタル・ゲイン課税の今後のあり方について、租税の基本原則に立ち返って検討している。 具体的には、まず、わが国キャピタル・ゲイン課税制度等の変遷、現行の同課税制度の内容の整理と問題点の抽出、主要諸外国の同課税制度の調査・考察を行っている。次に、同課税の上記の問題点に関する先行研究について、整理し、考察している。最後に、わが国の同課税制度の今後のあり方について考察し、次の内容の提言をしている。 所得税の理念において、最優先すべきことは課税の公平の確保である。キャピタル・ゲイン課税において、保有資産の移転の形態(譲渡・相続などの形態)によって、異なる取り扱いをすることは、課税の公平に反する。従って、キャピタル・ゲインへの全額課税を基本とし、相続時においても、いわゆる、みなし譲渡課税を全面適用すべきである、とする。 本論文は、基本的な文献の適切な収集・利用、論理の一貫した展開、先行研究の適切な整理・考察、論点についての検討ととりまとめがなされており、修士論文として優れたものである。
2	学術 (修士論文)	モリヤ ヒロシ 森屋 宏	社会科学 研究科	2	江藤俊昭ゼミ	新たな地方議会の活動における新たな会派の役割を解明しようとした意欲的な論文である。会派は、議会運営にとって重要であるが、その位置づけも曖昧であった。会派はバリエーションが多すぎて、全体を展望することは困難である。都道府県議会のように、中央政党と密接に結びついた会派の存在とその運営を行っているところと、町村議会の多くのように、会派がなく会派運営が行われていないところまでさまざまである。また、地方議会は、「住民自治の根幹」であるにもかかわらず、その力を発揮できていなかった。地方議会の役割が確定せず、したがって、会派の役割も明確ではなかった。地方分権一括法の施行により、地域経営の自由度が高まり、それを意識した議会が動き始めた。新しい議会における会派の役割を明確にすることは、自治を進める上で重要な課題となった。論文は、こうした時代状況を強く意識したものである。新しい議会の役割として機関競争主義を作動させることを提起する。その際、会派が重要であり、その「エンジン」の役割を担うことが重要であることを強調している。そして、新しい会派は政策の一致を前提とし、新しい議会運営だけでなく、選挙のマニフェストにまでに及ぶ。また、会派は、地方分権時代の地域争点を意識して中央政党的下部機関ではなく、独自の理念と組織を持つ地域政党も視野に入れた会派を想定している。住民自治を進める議会の役割と会派の役割を明確にしたことは多いに評価できる。しかし、規範としての方向は確認しているが、その検証材料は乏しい。みずから体験した山梨県議会の経験をより客観的に調査して、その方向を豊富化する課題は残されている。 こうした課題があるとはいえ、地方分権時代の住民自治を進める上での重要で従来開始されてきたテーマに意欲的に取り組み、一つの方向を指し示した意味で、「スチューデントズオブザイヤー賞」に十分該当する。

【スチューデント オブザ イヤー賞・大学】

NO	部門	氏 名(団体名)	学科	学年	所 属	推 薦 内 容
1	学術 (卒業論文)	キタハラ マサヒロ 北原 幹大	法	4	實川和子ゼミ	当該卒業論文のテーマは、「債権法改正に関する比較法的研究－射倖契約導入の是非についての私的考察－」である。近時、法務省法制審議会において行われている債権法改正にあたり、射倖契約を導入するべきであるとする主張を考察している。さほどなじみのない射倖契約に着目した視点に新規性があること、また、調査内容および分析については、判例、改正の議会議事録、関係論文、比較法的考察にあたり、さらには、ドイツ語およびフランス語の原典にあたるなど幅広い資料に基づいて考察していることなど、極めて意欲的な論文となっている。 他方で、射倖契約導入に賛成する少数説の立場を支持している点につき、必ずしも多くの同意をえられるものではないという可能性、導入のメリットなどについての検討の不十分さなどもみられないわけではないとも考えられる。しかし、それにもかかわらず、少数者の立場を支持するに至ったことは、マイナーなこのテーマに真摯に取り組んだ結果であるともいえる。 なお、当学生は、ゼミの幹事長を務め、ゼミ活動も積極的に行い、多大な貢献をなしてきたこともここに付言する。上記のような諸点に基づき、全体として、本論文作成にあたっての問題発見能力、論理的分析能力、文献読解力、文章作成力などに優れた点があると思料し、ここに法学科優秀論文およびその執筆者として推薦する次第である。
2	学術 (卒業論文)	タナカ マイ 田中 麻衣	政治行政	4	原 禎嗣ゼミ	当該論文は、江戸期における女性の地位を刑罰から追求したもので、「はじめに」における問題意識も明瞭であり、江戸期の漢文資料の収集も豊富で、読み込みである現代語訳も適切で、かつ内容に関しても、江戸期の既婚女性の不義密通に対する刑罰の状況を判例に即して明らかにすることによって、男性よりも不当に差別されていたこととともに、刑罰の実行が夫の裁量によって変化するというしたことや、既婚女性が必ずしも従属的な地位に安住していたわけではないことを明らかにした。 「はじめに」で展開されている問題意識の鮮明さ、問題意識と結論の整合性といった形式面のみならず、内容面においてもオリジナル性をもった学術的価値のある論文となっていることが「最優秀卒業論文」として選出された理由である。
3	学術 (卒業論文)	オクハラ ユウマ 奥原 佑馬	現代 ビジネス	4	日高 優一郎 ゼミ	本論文は、ファッションにおける消費者の購買行動と情報探索行動について、実証研究を通じてファッションへの消費者の意識を五つのタイプに分類し、パターン化を試みた結果、ファッションの購買行動・情報探索行動における消費者行動の差異は、ファッションへの意識の違いに求めることができるという独自の主張を導き出したことが、非常に評価できる。 本論文が優れている点は、第1に、議論の進め方が非常に丁寧である点である。先行研究の整理を行いながら、実証研究の枠組みを、インタビュー調査と行動観察の2種類の方法を用いた探索的リサーチから導出し、本論文で検討していく議論の位置づけを明確に示しながら議論を進めている点は他の学生の模範になる。第2に、113名の大学生への質問票調査を実施したこともさることながら、得られた情報に関する記述が優れており、非常に示唆に富む内容になっている点である。第3に、当然のことながら論文の形式が整っていることである。これらの点は、他の学生の模範となるべき項目であり、優秀卒業論文としてふさわしいと考える。
4	学術 (卒業論文)	コミヤマ ユウミ 小見山 優未	経営情報	4	黒澤壮史ゼミ	当学生の卒業論文は、伊丹敬之による日米企業の利益率格差を論じた先行研究を基に、直近5年のデータによって同研究で論じられていた日米企業の格差の時系列的な変化について考察したものである。 伊丹の研究が2000年代前半までのデータに基づいて議論を展開していることに着目し、その後のサブプライム問題・リーマンショック、アジア企業の更なる台頭といった変化を経た中でどのような変化が起きていたのかを探る、というものであった。調査方法は先行研究とほぼ同様のやり方で行われ、日米企業ともに2007年度～2012年度までの5年間のデータを用いている。 本論では、当学生は米国優位が顕著であった先行研究と比べて、差を縮めている業界と差が開いている業界に着目しながら、その違いがどこにあるのかを探るという発展的な問題意識が示されており、その結論を内部資源の蓄積・構築のプロセスにあると結論付けている。そして、本学術領域ではしばしば「日本VS米国」といった地域間の問題設定がなされることがあるが、本論では国単位の分析において共通性を見出すことは難しく、個別産業と企業の動向から丁寧に説明していく必要性を説いている。 本論文は3つの視点から評価される。第一に、学術的な先行研究を参照しつつ、適切な問題意識に基づいて調査設計されている点である。次に、複数名の研究者が長期で行った調査手法を、合理的な範囲で修正し、個人の卒業研究によってデータ収集・分析を行っている点である。最後に、直近のデータと比較することによって、独自の結論を導き出している、という点が評価される。
5	学術	ノダ セイコ 野田 聖子	管理栄養	4		本学生は、管理栄養士としてさらに知識・自術の向上を図るとともに、本学部で行った研究を深めることを目指して、卒業後大学院修士課程への進学を志した。日本女子大学大学院家政学研究科食物・栄養学専攻の入学試験に合格し、進学を決断したことは、高い学力と明確な目的意識を備えていることを示すものとして評価される。成績が優秀であることは、エクセレント奨学生として2～4年生の3年間連続して認定を受けたことから明らかである。管理栄養士国家試験全国統一模擬試験でも常にトップの成績であり、こうした実績は他の学生にも良い影響を及ぼし、学習面での牽引役となった。資格については、食品表示検定初級・HACCP管理者資格などを取得している。 研究面では、「ラット神経膠腫細胞に対する山菜抽出物のアポトーシス誘導効果」について、教員の指導の下に実験を行い、平成25年度日本農芸化学会大会(平成25年3月16日、仙台)において共同研究者として発表に参加した。本研究は、地域食料資源の有効活用による健康増進に寄与するものであり、大変優れた内容である。 学業面のみならず、謙虚で誠実な性格は、教員や周囲の学生から厚い信頼を得ている。健康栄養学部一期生として、これまでの学業における研鑽を高く評価し、ここに推薦する。

NO	部門	氏 名(団体名)	学科	学年	所 属	推 薦 内 容
6	スポーツ	濱本 ユタカ ハマモト	法	4	レスリング部	2013年全日本学生レスリング選手権大会 フリースタイル66kg級3位 第39回内閣総理大臣杯全日本大学レスリング選手権大会 フリー66kg級2位 2013年東日本学生リーグ戦 団体優勝主将として貢献
7	スポーツ	高橋 ナナ タカハシ	現代 ビジネス	2	スケート部	2013ユニバーシアード冬季大会 スピードスケート女子5000m5位、チームパシュート2位 第86回日本学生氷上競技選手権大会 スピードスケート女子3000m1位(大会新記録)、2000mリレー2位(大会新記録)
8	スポーツ	後藤 テルヤ ゴトウ	法	4	ラグビー部	平成25年度関東大学ラグビーリーグ戦 2部優勝・1部昇格 4年間レギュラー及び4年時は主将として貢献
9	スポーツ	井上 ヒロト イノウエ	現代 ビジネス	3	陸上競技部	第45回全日本大学駅伝対校選手権大会 第2区(区間賞)、総合5位に貢献 第68回香川丸亀国際ハーフマラソン 3位(学生歴代5位) 世界ハーフマラソン選手権 日本代表
10	スポーツ	田中 イズキ タナカ	法	3	ホッケー部	第35回女子全日本学生ホッケー選手権大会 優勝(最優秀選手賞)
11	スポーツ	山崎 タマミ ヤマザキ	現代 ビジネス	2	柔道部	第6回東アジア大会柔道競技 48kg級3位 2013世界ジュニア柔道選手権大会 48kg級3位 平成25年全日本選抜柔道体重別選手権大会 48kg級2位 平成25年全日本ジュニア柔道体重別選手権大会 48kg級優勝
12	スポーツ	江原 ナイト エハラ	政治行政	2	水泳部	第6回東アジア大会 200m自由形優勝、400m自由形2位、800mリレー2位 FINAワールドカップ2013東京大会 400m自由形3位
13	スポーツ	菊池 シンヤ キクチ	法	4	硬式野球部	2013年関甲新学生野球リーグ戦 2季連続ベストナイン賞を獲得、Aクラス入りに貢献
14	スポーツ	仲村 メグミ ナカムラ	政治行政	4	空手道部	第57回全日本学生空手道選手権大会 女子個人形5位 第41回関東学生空手道選手権大会 女子個人形優勝
15	スポーツ	妹山 レナ セヤマ	法	4	ソフトボール部	東日本大学選手権大会 初優勝、主将としてチームを牽引し、勝利に貢献 3年次には、大学全日本選手として東アジアカップにも出場
16	スポーツ	田中 ヒロキ タナカ	法	4	サッカー部	平成25年度東京都大学サッカーリーグ 1部優勝、主将として貢献 Jリーグ ディビジョン2 カターレ富山に入団
17	団体活動	齋藤雅代 ゼミナール 3年生	法	3		法学科では、今年度から、一方ではゼミ活動および交流の活性化を図るとともに、学生の学習意欲を向上させ、プレゼンテーション能力を養うことを目的として、ゼミ対抗法律討論会を開催することになった。ゼミ対抗法律討論会では、法律の事例問題を出題し、出場するゼミは、事前にその問題について検討した上で、討論会当日にプレゼンテーションを行い、会場との質疑も含めて審査をし、最優秀ゼミが決定した。さらに、最優秀に選ばれたゼミは、他大学(今年度は白鷗大学・新潟大学・高崎経済大学と本学の4大学が参加した)との大学対抗法律討論会に本学の代表として出場することになった。 今年度は、平成25年11月9日(土)に、本学のゼミ対抗法律討論会を開催し、法学科の4つのゼミが参加し、厳正な審査の結果、最優秀ゼミに齋藤ゼミ(演習Ⅱ)が選ばれた。受賞理由は、立論が論理的に組み立てられており優れていたこと、プレゼンテーションも明瞭で聞き取りやすく、質疑応答でも会場からの質問に的確に答えていたことが挙げられる。 また、その後、平成25年12月7日(土)に、新潟大学で行われた四大学対抗法律討論会に出場し、齋藤ゼミは全7チーム中2位という優秀な成績を収めた。受賞理由は、知識面では多少他のチームに劣る部分もあったところ、出題の意図を的確に捉えて法的な論点をきちんと本質的に検討していたこと、プレゼンテーションも聞き取りやすく、質疑応答でも会場からの質問に堂々と答えていたことが挙げられる。 このような好成績を収められたのは、論者として壇上に立つ学生だけでなくゼミの仲間が一丸となって問題に取り組み、ゼミの時間以外にも集まって活発に議論しながら立論を組み立てたことによるものと考える。このような活発的なゼミ活動を行うことは、法学科がこの企画を新たに始めた目的とも合致する。
18	学内活動	平出 ゆかり ヒライデ	政治行政	4		SSA(スポーツ強化指定選手への学習支援活動)に参加し、多大な貢献をした学生であり、平成23年度、24年度、25年度の3年間を通じ、SSAに最も貢献した学生である。 授業「アスリートキャリア形成」では、ホッケー部(男女)、柔道部(男女)、バスケットボール部(男女)の学生に対して、良好なコミュニケーションをとり、適切なアドバイスを行った。 また、この3年間を通して、中心的なアドバイザーとして活動し、スポーツ強化指定選手の勉学をサポートしてきた。さらに、他のスチューデント・アドバイザーのお手本的存在となっていて、その面でも貢献した。

NO	部門	氏 名(団体名)	学科	学年	所 属	推 薦 内 容
19	学内活動	ヤマモト ユイ 山本 裕依	経営情報	4		本学生は、経営情報学科の在学学生として他の学生の模範となっていることはいうまでもなく、人物的にもたいへん優れた学生である。学業成績の面においては、在学3年次終了時点でのGPAによる評価は、3.91と好成績を残しており、これは学年1位の成績でもある。このような学業成績の評価は、今年度のエクセレント奨学金のA種奨学生の判定を頂いている現状もある。（前年度までは、エクセレント奨学金のB種奨学生であった。） 学内外の多くの活動にも積極的に参加をしてきたので、その一部を紹介する。まず、カレッジスポーツセンターが奨励をしている課外学習支援制度（SSA）のチューデントアドバイザーを2年次より務め、その役割の難しさを見事に克服し、所定の目的を達成させた。学生先輩による後輩アスリートへの学習支援は、生活のアドバイスにもおよぶ非常に荷が重なる役割であるといえる。この活動による担当指導教授や後輩からの信頼も厚く、多くの成果を残してくれた。 また、本学の個性づくりの一環としてスタートした2種類のフリーマガジンの発刊にも関与してきた。一つ目は、女性向けの雑誌である「Blue Star Magazine」である。富士川のラフティングを取材し、雑誌への掲載、また、PR活動としてラジオに出演し、配本活動を展開するなど、取材から配布までの一連の作業を体験する貴重な経験をするとともに、本学のPR活動にも精力的に取り組めたといえる。二つ目は、「YAMANTA」というリクルート社のプロの編集者と学生がグループを結成し、取材先の決定、アポ取り、アンケート調査・分析、制作発表会を行ってきた。一連の活動のプレゼンテーションでは、最優秀賞の評価を頂いている。 ゼミの活動では、学生によるスポーツの応援企画に中心的な役割を果たした。第89回、第90回東京箱根間往復駅伝競走の学生応援を実施するなど、その活動は多岐にわたっている。本人は水泳のインストラクターをしており、大好きなスポーツ活動にも積極的に参加することとアルバイト活動をうまく折中させているといえる。 在学時の3・4年生の間、入江ゼミのゼミ長としてリーダーシップを発揮してくるとともに、自分自身の成長をも成し遂げた。学業と課外活動を見事に形あるものとして成立させ、人間的にも同僚・後輩から幅広く信頼される学生生活を送ってこれたことは、本学の建学精神に基づいたチューデントオブザイヤー賞の候補として相応しい人物であると思われる。

【チューデント オブザ イヤー賞 ・ 短期大学】

NO	部門	氏 名(団体名)	学科	学年	所 属	推 薦 内 容
1	資格	カウ リサ 加藤 里沙	食物栄養	2		推薦する本学生は、栄養士資格取得の学業を最も優秀な成績で現在まで修めている。（AA:36単位/67単位中）忙しい日々の学習の時間に加え、自身のキャリアアップのため、資格取得の目標に向け絶ゆまぬ努力を重ね、難関である以下の5つの資格に合格を果たした。 ①TOEIC公開テスト715点取得 ②秘書検定2級 ③レストランサービス技能検定3級 ④日本エアロビック連盟エアロビック技能検定4級 ⑤日本エアロビック連盟キッズ・ジュニアエアロビック指導員 これら資格を取得するために、幅広い勉学の中で培った知識、精神力、忍耐力、チャレンジ精神は、これからの社会のニーズに対応できる新しいスタイルの栄養士像として、今後の社会での活躍が大いに期待できる。 また、クラブ活動ではフーズサイエンスクラブに所属し、グループのリーダー的存在として常に探究心を持ち続ける姿勢で、課外での研究活動をリードし、計画性や協調性に優れ、周囲の友人からの信頼も厚く、望ましい学生像として評価できる。 今後社会で望まれる栄養士像は、我が国の健康寿命を延ばすために『食』を通じて人々にあらゆる角度から貢献できるよう、幅広い知識や実践力を深めていかなければならない。『自らの可能性を多くの視点から探り、努力することを惜しまない取り組み』を学生生活の中で実践してきた本学生は、短期大学の資格取得部門において、優れた功績を残したと判断できる。
2	社会活動	ヨダ アヤコ 依田 絢子	食物栄養	2		本学生は、勉学への意欲が高く、何事にも熱心に取り組む非常に真面目な学生であり、優秀な成績を修めた。食育推進活動を通した地域貢献でも積極的に携わり、優れた成果をあげてきた。また、「レストランサービス技能士3級」の資格取得にも挑戦し、学科試験と実技試験を見事クリアして資格を取得した。この努力の結果、人気有名企業である「株式会社 新宿高野」に、本学から初めて就職内定を果たした。このような優れた成果は、チューデント・オブ・ザ・イヤー賞にふさわしい学生と考えられることから、社会活動部門に本学生を推薦する。 食育活動の具体的な内容については、株式会社クアアンドホテル(石和健康ランド)とのレシピマッチングである。この活動は、本学と山梨中央銀行との包括的業務連携に関する協定の「健康および栄養教育の推進」「食育の推進」での業務連携で行ったもので、ホテルが夏に企画した「スイーツフェア」で販売するデザート開発に臨み、グループのリーダーとして活躍した。ホテル側からは、①ホテル内にある和・洋・中・麺・居酒屋の各店舗で提供できるよう5品以上のレシピを作成すること、②夏野菜のトマト・ジャスミン・そば粉・プラムジュレを使用すること、③地元の食材を活用すること等の要望があり、それにそって7品のデザート(ラフランスとクコの実入りのジャスミンゼリー、クーププラム、トマトのレアチーズケーキ 他)を提案した。6月には試食会を開催した。提案したデザートは、ホテル側の調理師が食材の入手状況を確認、現場で可能な調理工程に訂正し、実際に販売した。クアアンドホテルとのマッチングは2度目であり、前年度に「ランチメニューの評価と改善策」、「ランチメニューで提供できる簡単なデザート」の提案を行った成果が認められ、引き続き業務依頼を受けて実施したものである。 本活動は、「山梨学院大学 by AERA」でも紹介された。短期大学では、全学をあげて食育推進ボランティアに取り組んでいるが、本活動は後輩たちのよき見本になったと思われる。
3	社会活動	伊藤美輝 ゼミナール 2年生	保育	2		山梨県立美術館において平成25年12月14日(土)より平成26年1月19日(日)の期間に、山梨県立美術館企画展「動物ものがたり」が開催された。伊藤ゼミナールの2年生14名は、その中の第6部「動物と仲良し」のコーナーを企画及び運営を担当した。28日という期間に来場した親子が読書コーナーと工作、ゲームコーナーで、見てきた動物の原画のイメージを再度楽しむ内容を企画して、多くの好評を得ることができた。4月から準備にとりかかり、1月までの長期間の活動となったが、日常で学ぶ内容を、保育の現場とは違った公共の場で展開することで、多様な学びとなったと言える。 また、「今回の企画は、今後の美術館における展示内容にも大きな示唆を与えた」と山梨県立美術館の学芸員より評価を得ている。